　1990年のどこかの中学生、男の子の物語

シーン１．中学校

梅雨に入り始めた頃、仲の良かった男の子3人組でいつものように話して遊んでいた時の話

少年A「昨日さぁ～、兄ちゃんから聞いたんだけど、隣町の廃校夜なんか出るらしいぜ」

少年B「俺怖いの苦手だわ。」

少年C「えっ、おもしろそうじゃん！！今日の夜行こうぜ」

少年A「さすが少年C！」

少年B「やめとこうよ…」

少年C「なら～～で負けたやつが入ろうぜ」

少年A「あり！」

少年B「それはやばいって…」

少年C「はい、少年Bの負けw」

少年A「よし！なら、今日の22時に廃校前に集合な！」

少年B「…。」

シーン２．廃校前

　その日の夜…

少女C「遅いよ少年A！」

少女A「ごめんごめん、懐中電灯とか探しててw」

少年B「ほんとに一人で行くの？。」

少年C「そうだよ！俺ら見回ってる奴がいないか探しながら待っといてやるから」

少年B「絶対だよ。」

シーン３．廃校内

　学校内に入った…少年B（帰りたい。）

（4階の～～室に行って写真撮ってすぐ帰る。）

始めてきた場所なので探り探り一階を歩いていた。

しかし、廃校なので階段の下に荷物やゴミがいっぱいで通れそうになかった。

そこで別のルートを探し始める。

・学校の見取り図が落ちていて拾う（教室の場所を把握する。）

荷物用エレベーターがあることに気づいて見に行くも動かない

突然、少年Aから借りていた懐中電灯がチカチカし始めて消えてしまいそうになる。

家庭科室に行き、がれきをどけるもの・何か照らせるものなどを探す。

そこで、

・ランタンとマッチを見つける

・同時に取扱説明書のような紙も見つける。(そこには裏世界に行ける手掛かりが書いてある)

シーン４．裏世界

　裏世界…

裏世界に行ける手がかりを元に裏世界に行くと急に雨の音と寒気がした

嫌なことに、元の世界に戻れる手がかりはどこにも書いていなかった。

なんの前触れもなく電気（非常口の明かりなど）が消え、そのとたん雷が落ちて

ほんの一瞬、雷の光で人影（幽霊）が見える。

恐る恐る見えたほうに行くと何もなく、怖い中探索を続ける。

(ここで心拍音や怖いBGMを流すほうがいいかも)

今いる場所が前にいた場所と何か違うことに気づくがどうすればいいのかわからないので探索

(荷物やゴミがなく塞がれてないのを発見させる。か、どけれるようになっているか)

１．図工室に行き裏世界から現実世界に戻れる方法がわかる何かを見つける。

２． 階段を上がろうとするとまた雷と同時に幽霊が見えて追いかけられるので逃げる。

角をうまく使うか掃除道具入れまたはトイレで隠れて過ごす。

頑張って図工室に行き戻れる方法を探す

いったん裏世界から表世界に戻り裏世界には幽霊が存在して表世界には存在しないことを知る

表世界…

怖くなって出口に行きたくなるが、なぜか扉があかない・戻れないよういする。

もしかしたらあいつら(少年A　少年B)の仕業じゃないかと思いとりあえず4階を目指す。

裏世界に行って階段の障害物を何とかするか別の道を探して2階に行こうとする。

　裏世界と現実世界の行き来…

ここからはPlayerしだい

　4階に到着…

やはり4階からもエレベータは動かないみたい

4階を探索して校長室に到着

パターン①

そこでこの学校が載っている新聞を発見する。

5年前にこの学校でいじめがありその女子生徒がこの学校で自殺したという記事

その女子生徒は中世ヨーロッパが好きでよく中世ヨーロッパについての本を読んだり家には自作の鎧があるなどの噂をされていた。そのことでいじめられ自殺にまで至った。

目撃情報・・・自殺の時、当時ヨーロッパでよく使われていたランタンを持って学校に来ていたのを住民が目撃していた。(ここは個人的に考えたものです)

パターン②